発達理論の学び舎

Back Number: Vol 162

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

3221. 宇宙からの帰還のような感覚

3222. 文化の衣を脱いで

3223. アッセンでの立ち往生

3224. オランダに戻ってきて

3225. 魂の求める場所で

3226. 自らの資質への問い

3227. 芸術教育について

3228. 生態系としての意識

3229. 静けさで満ちたフローニンゲンの朝

3230. これからの生活拠点

3231. 志望動機書のドラフトの執筆を終えて

3232. 日曜日を振り返って

3233. 推薦状に関して

3234. 発達を促す見えない力：意識を向けることの大切さ

3235. ツールのツールに成り果てる現代人

3236. 古典的な読書法への回帰：創造プロセスの追体験

3237. 記号的メタモーフォシス

3238. ハーバード大学教育大学院への出願に向けて

3239. 今日の活動計画

3240. 協働執筆中の書籍の進捗状況

© YOHEI KATO 2018

3221. 宇宙からの帰還のような感覚

つい先ほどボストンからオランダに戻ってきた。ニューヨークからアムステルダムまでのフライトは行きよりも一時間短く、六時間ほどであった。

フライトが夜の便であったため、夕食を摂った後、睡眠を取ることにした。飛行機での移動は想像以上に心身のエネルギーを使うため、フライトの間は無理をせず、長いフライトであれば必ず睡眠を取るようにしている。

今から一年前に日本に一時帰国した際に、長時間のフライトの間にほとんど睡眠を取らなかったため、日本に到着して数日間ほど体調を崩してしまった。その時の経験があるため、長時間のフライトの際には睡眠を必ず取るように心がけている。フライトの最中に睡眠を取ったおかげが、今の心身の状態は良い。もちろん、長いフライトで疲労があることは間違いないため無理はできないが、この調子であればフローニンゲンに戻ってきてからも、近所のスーパーに買い物に出かけたり、探究活動と創造活動に少しばかり従事できそうだ。

今日のオランダの空は見事な秋晴れである。気温に関してはボストンよりも低いが、とても清々しい。時刻は午前十時を迎え、正午にはフローニンゲン駅に到着する。

先ほど上空からアムステルダムを眺め、スキポール空港に着陸した時、自分がどこか宇宙から帰還したかのような感覚があった。慣れ親しんだオランダに戻ってきた安堵感と同時に、オランダという国そのものを相対化するような意識が生起した。ボストンの空港に着陸した際には、単なる接近しかなかったのだが、スキポール空港に着陸した時には、相対化からの接近があった。この違いは極めて大きいように思う。

ある国の文化を深く理解するためには、相対化からの接近が必要である。さらに言えば、一度その文化から離れることにより、これまで同一化していた文化から脱同一化する必要が最初のステップとしてある。これは日本の文化を深く理解する際にも必要なステップであり、国の外に出てみて初めて、最初のステップである脱同一化が起こる。そのあとに、再びその文化に戻ってくるというプロセスを経ることによって、相対化からの接近が起こるように思える。

© YOHEI KATO 2018

今、フローニンゲンに向かう列車の車窓からは、のどかな風景が見える。牛の大群が牧草を食べている。遠くの方にはヤギのような動物も見える。右も左も酪農国らしい風景が広がっており、私をとても落ち着かせてくれる。こうした光景はボストンにはなかったように思う。

この生活環境の違いは私にとって非常に大きな意味を持っている。仮に来年ボストンで生活をすることになれば、それは修練と割り切る必要があるだろう。ボストンにも自然はあるのだが、オランダのそれとは少しばかり異なる。人口密度も随分と違うため、ボストンではまた新たな心身を築き上げて生活を営んでいく必要があるだろう。

仮にボストンではなく、スイスのドルナッハで生活をすることになれば、オランダよりものどかな環境の中で過ごすことになるだろう。自分の運命はどちらに私を導くのだろうか。今はどちらなのか全く予想がつかない。どちらであったとしても、自分の運命に身を任せ、自分のなすべきことを日々進めていくだけだ。フローニンゲンに向かう列車の中：2018/10/5（金）10:30

3222. 文化の衣を脱いで

今日のオランダの天気は本当に素晴らしい。雲はほとんどなく、飛行機雲が空に落書きをしているだけあり、今日は快晴だと言える。天気予報を確認してみると、今日から一週間は晴れの日が続くらしい。七泊八日のボストン旅行を終え、今日から少しばかり時間をとって、ゆっくりと旅の経験を咀嚼していきたいと思う。いや、咀嚼の前に、旅の経験を一度自分の深層で発酵させる必要があるだろう。

発酵の過程で自分の中から湧き上がってくるものを少しずつ咀嚼していく。それは全て文章を書くという内省実践を通じて行う必要がある。文章を書かなければ、経験の咀嚼はありえない。どのような文章であってもいい。自分に書ける範囲のところまで文章を書いていくということ。それが今の自分の範囲を超えた次の自分を生み出していく。日記の執筆というのは、範囲の確認であり、範囲の外の自分を引き込むことなのだ。そのような考えがふと思い浮かぶ。

頭の中だけで範囲を定めようとしないこと。人間の頭はそれほど器用にできていない。文章を書かなければ、人間の心が持つ非線形性に巻き込まれ、そこから一歩も外に出られないだろう。文章というあえて線形的に進む実践を十分に活用すること。文章は形式的には線形的に進むが、それは

自分の内側の非線形的な現象に合わせて進んでいくという面白い特徴を持つ。これまでと変わらず、今日から再び自分のペースで日記を綴っていくことにしよう。

旅に出かけるたびに、自分の意識が少しずつ変容の方向に向かっていることがわかる。旅はおそらく、これまで自分が順応していた文化から一度自分を引き離すという効果を持つ。そうした旅の経験を積み重ねていけばいくほどに、良かれ悪しかれ自己を規定する文化の衣が剥がれ落ちていく。文化の衣が剥がれ落ちれば落ちるほど、自己の深層に横たわる自分の核のようなものが見えてくる。それは何ものにも囚われずに絶えずそこにある。それは解放の必要がないほどに、解放された存在である。言い換えると、それは自由を体現した自己の存在だと言っていいだろう。本質的には、解放されるべきものはそうした自己の深層に横たわるものではなく、それを取り巻く諸々の文化的衣なのだと思う。

この十年を振り返ってみると、大阪、サンフランシスコ、ニューヨーク、ロサンゼルス、東京、フローニンゲンと色々な町で生きてきた。それらの町で生活を営みながら、世界の様々な場所に旅行に出かけてきた。そうした一つ一つの経験が、自己を取り巻く文化の衣を徐々に引き剥がし、自分の真の顔を開示することを促進していた。ボストンからアムステルダムの空港に着陸した際に、宇宙から帰還したかのような感覚があったことを先ほどの日記で言及していた。

仮に地球から離れ、本当に宇宙から地球に帰還した際には、大きな意識の変容が起こるように思える。それはもちろん、意識の状態の変化であり、意識の段階の変化ではないが、そうした意識の状態の変化は段階の変化を生むために不可欠なものである。

地球の外から地球を眺め、宇宙空間の中で自己を見つめるとき、いったい自分は何を思い、何を考えるのだろうか。自然の中で暮らすことと宇宙に出かけること。それは近い将来に実現させたいことである。あと一時間ほどでフローニンゲン駅に到着し、そこからまた新しい日々が始まることを確信している。フローニンゲンに向かう列車の中：2018/10/5（金）10:48

3223. アッセンでの立ち往生

今回のボストン旅行においては、何一つトラブルはなかったように思う。今、フローニンゲンにほど近いアッセンという駅のカフェでこの日記を書いている。

スキポール空港からアッセンまでは電車が問題なく走っていたのだが、なんと電気の供給切れということでアッセンで立ち往生することになった。実はオランダの鉄道はかなり杜撰なところがあり、数分間の時刻の遅延は日常茶飯事で起こり、スキポール空港からフローニンゲンに戻ってくる時に、実は過去にも何度も途中駅で立ち往生する事態に見舞われてきた。

だがいつもであれば、途中で降りた駅から無料のバスがフローニンゲンまで走っており、列車に乗せる代わりにそのバスに乗客を乗せるという代替手段を取って対応することが常だった。しかし今日は、電気の供給切れといういつもと異なる事態のためか、アッセンからフローニンゲンまでの無料のバスが運行していない。そのため、アッセン駅の構内にあるアジア料理店で昼食を摂り、その横にあるカフェでこの日記を書いている。アッセンの駅には0.5ユーロを支払う有料のトイレが一つあるのだが、今回はなぜだかそれを無料で利用することができた。

有料のバスに乗ってフローニンゲンに戻ることもできたのだが、電気の復旧まで後一時間ということもあり、特に焦ってはいなかったため、カフェで復旧を待つことにした。そのカフェで小さなサイズのコーヒーを注文すると、なんと無料とのことだった。メニューには2.10ユーロと書かれているのだが、それはミディアムサイズ以上の場合なのだろうか。レジですでにカードを取り出し、支払いの準備をしていたため、無料と言われて一瞬戸惑ってしまったほどだ。

念のため、もう一度店員に確認すると、オランダ鉄道からの寄付でこのコーヒーが無料で提供されているようだ。アッセン駅で途中下車せざるをえないトラブルに見舞われたが、特に焦って帰る必要がないため、コーヒーを飲みながら、過去の日記の編集をしたいと思う。

今日は平日なのだが、オランダには平穏な空気が流れ、時間も緩やかに進行している。金曜日の午後に、何一つ焦ることなくカフェでくつろいでいる自分を静かに観察している。いろいろな国で様々な体験をすることによって、絶えず平静な自己が随分と確立されているように思う。おそらく、日本の文化的な衣が自己を覆っていた時であれば、このような事態に見舞われると、不要な焦りや苛立ちすらも感じていたかもしれない。それが今では、思わぬ形で与えられた一時間ほどの時間をゆっくりと過ごそうとする自分がいる。

© YOHEI KATO 2018

今日はフローニンゲンの自宅に戻ったら洗濯をしようと思っていたが、この分だと明日の朝に洗濯をした方がいいかもしれない。今日は近所のスーパーに買い物に行くことに留め、作曲実践をしたり、気の赴くままに読書をし、早めに就寝しようと思う。

アッセンのカフェの中に流れる時間はとても緩やかだ。アッセン：2018/10/5（金）13:05

3224. オランダに戻ってきて

ボストンからオランダに戻ってきてからの初日が始まった。フローニンゲンの自宅の周りの静けさがとても懐かしく思える。同時に、この落ち着いた環境には改めて感謝をする必要があると感じている。

一週間以上この町から離れていたためか、フローニンゲンに戻ってくると、紅葉がより一層進んでいることに気づく。書斎の窓から見える景色の色彩が確実に変化している。緑色が失われ、その代わりに黄色や赤色が目立つようになった。気候に関しても申し分なく、今日から一週間は晴れの日が続くようである。ただし、明日は最低気温がなんと2度まで下がるとのことであり、十月に入ったばかりであるのにそこまで冷え込むことには驚かされる。

ボストンからフローニンゲンに戻ってくるまでの疲れを癒すために、昨日は夜の八時半に就寝した。そこから今朝は午前十時半まで寝ていた。時間に換算すると、相当の時間を睡眠に充てていたことになる。

ボストンからニューヨーク、ニューヨークからアムステルダム、アムステルダムからフローニンゲンへの移動によって、心身に疲労があったことは確かであるが、昨夜の睡眠のおかげで、今は随分と調子がいい。しかし今日は無理をせず、今日から改めて始まるオランダでの生活に向けて、心身をさらに整えていきたいと思う。

今日と明日の時間を使って、大学院への出願のための志望動機書を執筆しようと思ったが、今日その執筆に時間を充てるのではなく、明日に集中してドラフトを作成しようと思う。今日はその代わりに、ゆっくりと読書をしたり、作曲実践を行ったりしようと思う。読書に関しては、ボストンの四店の古書店で購入した書籍や、ボストンの旅行中に自宅に届いていた数冊の書籍を読むことを行いたい。

ハーバード大学教育大学院(HGSE)の教授たちと話をしてみて改めて気づいたのは、ここからは今まで以上に旺盛に論文や書物を読んでいく必要があるということだった。さらには読み方や読む質についても考え直す必要があると思っている。HGSEの教授陣たちの知性からは学ぶこと──あるいは身体を通じて感じられる何か──が多々あり、彼らと学術探究を進めていくためには、より一層の精進が自分に求められることに気づく。

今日からは、芸術教育と教育哲学に関する書籍と論文を旺盛に読み進めていく。それに加えて、人間発達に関する文献についても再び読み返していきたい。秋の季節の緩やかな進行のように、自分の探究を緩やかに進めていく。そして今日は、作曲実践についても旅行前と同じように行っていこうと思う。旅行中の前半は全く作曲ができなかった。

作曲を行うエネルギーがないほどに、有意義な時間を過ごしていたと言えるかもしれない。今日からは再び作曲を行うエネルギーと時間があるであろうから、作曲実践についてもゆっくりと自分にできる範囲のことを進めていく。季節が深まっていくプロセスに足並みを合わせて、自分の諸々の活動を深めていきたい。フローニンゲン:2018/10/6(土)11:36

No.1336: A Shining Bell for Tomorrow

Today was my birthday, but everything was as usual. I'll be reborn tomorrow, and the new self will come. Groningen, 20:55, Sunday, 10/21/2018

3225. 魂の求める場所で

今日の起床は午前十時半と非常に遅かったため、朝食を昼食にしようと思う。いつもの朝食は、リンゴ一つ、ハチミツ入りヨーグルト、バナナ一本であり、それを30分から一時間ほどの感覚を空けて食べている。先ほどリンゴ一つを食べ、すでに正午を過ぎたが、まだヨーグルトとバナナを食べていないので、それらが今日の昼食となるだろう。昨夜から今朝にかけて12時間ほど睡眠を取ったことと、今日は昼食が軽いため、仮眠の必要はなさそうだ。

フローニンゲンで感じるこの優しさをなんと形容したらいいだろうか。それは形容することが難しいぐらいに自分を包んでいる。

今回ボストンを訪れた際に改めて感銘を受けたのは、そこが学術探究をするには申し分ない場所であるということだった。今回はボストンに旅行として足を運んだのだが、美術館を二つ巡る以外はハーバード大学の図書館で探究活動に勤しんでいた。

もう自分には抑えることのできない探究衝動があり、それを抑圧する一切のものから解放されつつあることを実感する。仮に来年ボストンで生活をすることになれば、私の探究活動はこれまでとはまた違う次元に参入することを予感する。

学術探究に打ち込む最適な環境がボストンに存在していることを実感できたこと。それが今回の旅の最大の収穫だったと言っていいかもしれない。一方で、学術探究に打ち込む素晴らしい環境を提供してくれるボストンに対して、違和感を感じている自分がいたのも確かだ。それは、「この町で長く生活することはできない」という類の違和感だ。言い換えると、ボストンは学術探究に打ち込む上では申し分ないが、そこで腰を据えて生涯暮らすような落ち着きは持っていないように感じられた。アメリカの建国の歴史を遡ってみると、間違いなくヨーロッパの文化の影響を受けていることは確かだが、実際のヨーロッパの土地に根付いている落ち着きと比べてみると、ボストンのそれはやはり見劣りすると言わざるをえない。

ボストンに住んでいる住民を観察したり、街に流れる時間や空気に敏感になってみると、ボストンは私の心身を大いにくつろがせてくれるような場所ではないことがわかる。心身の奥底に残る微細な緊張感の存在を常に認めることができた。それはおそらく、アメリカの競争社会という特質や、学術の世界においても競争が存在しているためか、学術都市のボストンで学術研究に打ち込むことができたとしても、真に落ち着いた生活をすることはここでは難しいということを実感していた。

今回ハーバード大学を訪問してみると、改めてこの大学が持つ巨大な力とマーケティングの巧みさには舌を巻いた。歴史という観点でみれば、ヨーロッパにはハーバード大学よりも長い歴史を持つ大学がたくさんあり、実際にフローニンゲン大学はハーバード大学よりも古い歴史を持つ。長大な時間をかけて初めて積み重ねられていくものがあることを考えると、世界にはハーバード大学よりも大きな蓄積を持つ大学がいくつも存在している。だが今回改めて、ハーバード大学の巨大な力を実感させられ、それは米国社会の特質と相まった、この大学がこれまで採用してきた政治経済的戦略と宣伝の巧みさによって生み出されたものなのではないかと感じさせられたのである。

© YOHEI KATO 2018

もし仮に私がマーケティングを専門としていたら、ハーバード大学が採用しているブランド戦略については是非一度考えてみたいところである。それぐらいに、ハーバード大学のマーケティングは巧みであると私は思う。そのようなことを考えていると、来年仮にボストンで探究生活を開始する幸運に恵まれたとしても、やはりそこから数年後にはヨーロッパに戻ってこようと考えている。昨日オランダに戻ってきて、この国は間違いなく自分をくつろがせてくれる場所だと再認識した。

存在の根源が感じる安心感がここにはある。近い将来にスイスのドルナッハで一度生活をしてみたいと思う。スイスの主要都市には一切関心がなく、スイスの片田舎のこの町がどのような雰囲気を持つ場所なのか、一度旅行としてそこに行き、近い将来には少しばかりそこで生活をしてみたいと思う。

とにかくこの人生において、私は自分の魂が求める場所で生活をし、魂の要求に応える形で日々を過ごしていきたいと思う。今の私の魂が求める場所はオランダであり、来年はまた違う場所を求めるかもしれない。

諸々の制約から自己を解放し、この人生に与えられた役割を全うしていくこと。それを絶えず念頭に置きながら、今日も自分にできることを少しずつ行っていく。フローニンゲン：2018/10/6（土）13:00

No.1337: Crossing Lines

Clouds covering the sky in the early morning already disappeared, and it's sunny now. I notice that our life consists of the infinite number of crossing lines. Groningen, 09:56, Monday, 10/22/2018

3226. 自らの資質への問い

今日はゆりかごに揺られているような秋の穏やかな土曜日だと感じる。木漏れ日が差す午後のひとときに、散歩がてら行きつけのチーズ屋に向かった。このチーズ屋はフローニンゲンの街の中心部にある。そこに向かうまでの道中、私の意識は随分と瞑想的であったように思う。

昨日までのボストン旅行によって、意識が瞑想的な状態になり、その意識状態がまだ続いているかのようである。フローニンゲンの街並みを新たな眼で味わうかのように、ゆっくりと散歩をしていた。

今日は土曜日ということもあってか、チーズ屋には客が多く、いつもは二人の店主のうち一人が店を切り盛りしているのだが、今日は二人の店主が共にいた。いつものようにナッツ類とチーズを購入し、店主と少しばかり雑談をした。店主との何気ないやり取りによって、自分の心がさらに安らいだことに気づく。

チーズ屋からの帰り道、過去七年間に及ぶ自らの探究のあり方を再度振り返っていた。端的には、これまでの七年間の探究を根底から見直す必要に迫られているように思う。

今回ボストンに足を運び、ハーバード大学の教授たちと面談できたことは非常に大きな意味を持っており、彼らの仕事に対する姿勢には打たれるものがあった。それは研究と学生の教育の双方においてである。

チーズ屋からの帰り道、自分はつくづく研究者でも教育者でもないということを考えていた。一言で述べれば、自分には研究や教育に携わる資質はないのだと思う。それらの資質は涵養可能なものであるが、私の資質はそれらの領域にないように思えてくる。確かに来年から再び大学院に戻るつもりではあるが、それは研究者になりたいがための決断ではなく、自ら率先して深めたいと思う関心事項があり、学術機関の中でそれを真に深めていくことができると判断したからである。

大学に所属する形で研究や教育をすることに自分は向いておらず、そのような資質がないことは自分がよく知っている。そうした資質を高めていくことが可能であっても、それに従事することは自分にとっては拷問のようであり、自らの人生を無駄にしているように思えてくる。

ではいったい自分は何に対して資質を持っているのだろうか、と考えさせられていた。やはり創ることなのだろう。あるいは、一人の人間として真に生きて行く過程を何かしらの表現手段を通じて形にしていくこと。そこに自分の資質のようなものをかろうじて見出すことができる。

今、その表現手段になっているのは日記の執筆であり、作曲だ。この世界の中で生き、この世界に関与する過程の中で考えたことや感じたことを、文章と曲の形として残しておくということ。おそらく

© YOHEI KATO 2018

自分にできるのはそれしかないのだということが見えてくる。学者として論文や書籍を執筆し、教授として学生に教えられる資質は自分にはない。そうした知性は自分にはないし、率先して高めるつもりもない。だが、自らの人生を真に生きること、及びその過程を文章や曲という表現手段で形に残していくということに関してだけは、何かしらの資質があるかもしれないと思う。

欧米での生活も七年目に突入して少しばかりの時間が経った。七年の歳月をかけて見えてきたのはそのようなことであった。

自らの人生を生き、それを形に残しておくこと。それはこれからも一生涯続いていく自分の営みであり、それが自分の人生そのものだと言えるだろう。フローニンゲン：2018/10/6（土）17:05

No.1338: An Autumn Wind

I can see an autumn wind from the window. I'll start to read Nelson Goodman's "Language of Art (1976)." Groningen, 15:29, Monday, 10/22/2018

3227. 芸術教育について

昨日、隣の家に預かってもらっていた書籍を受け取った。それは、オックスフォード大学出版の"The Oxford Handbook of Philosophy of Education (2009)"という書籍である。本書は500ページほどにおよぶ大著であり、教育哲学に関する28本の論文が収められている。そのうちの一つの論文を先ほど読み終えた。それはつい先日お世話になった、ハーバード大学教育大学院のキャサリン・エルギン教授の論文だ。今の私の最大の関心の一つは、芸術教育の価値と、その価値を貶める社会的な思考の枠組みの特性及び発生メカニズムであり、エルギン教授の論文は前者の関心事項を深めるのに有益であった。

論文としての長さはさほどないのだが、下線を引いた箇所は随分多く、書き込みをした箇所も多数であった。書籍や論文は、いかに書き込みをしながら能動的に読み進めていくかが重要であるとこの頃よく思う。書籍に一切書き込みをしないことは、何も考えていないことの証なのではないかと思われる。読了後に自分の考えをまとめるような文章を書かないことも、その書物を読んだ意味を薄めてしまうように思う。

© YOHEI KATO 2018

書籍や論文などの文献を読んでいる最中には、とにかく余白に書き込みをし、読了後には何かしらの文章を短くてもいいのでまとめておく。その内容は、別にその文献に関することでなくてもよく、文献から刺激された何かしらの思考や感覚を残しておくだけでいい。それが新たな思考や感覚を生み出してくれる。

エルギン教授の論文を読みながら得られたヒントとしては、エルギン教授が協働者であったネルソン・グッドマンの認識論を援用しているように、芸術教育の価値を認識論の観点から論じていくことは十分に可能であり、それは今までの自分にはないアプローチであるということだった。認識論の枠組みを用いれば、芸術教育に関してこれまで見えていなかったものを捉えながらその価値について論じることができるように思えてくる。日々の生活の中で作曲実践や絵を描いている最中によく思うのは、芸術活動は絶えず新たな自己発見をもたらしてくれるということだ。

人生の質が深まることに加えて、自己の気付かぬ側面に気付かせてくれることは芸術実践の一つの価値であるように思える。そうしたことを教育することの意義は、芸術というものが、文学や科学と同様に、リテラシーを必要とすることなのではないかという考えが芽生え始めている。

芸術に関するリテラシーを養わなければ、芸術作品を鑑賞することも、芸術作品を創出することもままならないのではないだろうか。言葉を読み書きできるようになるためには、言語リテラシーが必要であるのと同様に、芸術にも固有のリテラシーが存在しており、それを養っていくことが大切なのではないか。それを行う意義については、エルギン教授が述べている、芸術そのものの価値という論点と、ジョン・デューイが指摘するような実利的な側面があるだろう。もしかすると、自己発見や自己の人生そのものを深めていくという点は、デューイが指摘する実利的な側面に該当するのかもしれない。芸術作品に内包されている諸々のシンボルを理解するように努めることは、自己及びこの世界をより深く理解することにつながっているように思える。

昨日は、本書以外にも、グッドマンの主著“Language of Art (1976)”と“Ways of Worldmaking (1978)”が届いたので、明日以降にそれらの書籍も読み始めようと思う。フローニンゲン：2018/10/6（土）17:24

© YOHEI KATO 2018

3228. 生態系としての意識

時刻は午後七時半を迎えた。ボストンからフローニンゲンに戻ってきての初日は、とても落ち着いており、かつ非常に充実していた。

華麗な秋の足音が聞こえてくるかのような雰囲気に包まれた土曜日だった。先ほど夕食を摂りながら、私たちの意識というのは一つのダイナミックな生態系なのだということに改めて気付いた。

生態系の中には多種多様な動植物が生存しており、それら一つ一つが固有の知性を示しているイメージが浮かんできた。このイメージとほぼ同じ発想を持って人間の知性を研究していたのが、カート・フィッシャーの協働者であったポール・ヴァン・ギアート教授だ。

ヴァン・ギアート教授は数年前までフローニンゲンに在籍しており、引退後も学会などで発表を行っている。今年の春にアムステルダムで行われた学会では、ヴァン・ギアート教授と初めて実際にお会いする機会があり、そこで立ち話をしたことがとても懐かしい。

ヴァン・ギアート教授が述べていたことの中で興味深いのは、生物学者としてキャリアをスタートさせたジャン・ピアジェの研究者としての夢は人間の知性を生態系として探究していくことである、というものだ。

ピアジェの発想を少しばかり拡張させると、知性そのものを生態系として見立てることができるのに加え、私たちの意識そのものを生態系として見立てることも可能なのではないかと思う。これはどの研究者が述べていたことかは忘れてしまったが、私たちの知性は意識空間の中で生起するものであり、それは外部の世界とのインターフェイスとして発揮されるという見方がある。

意識というのは広く漠然としているが、知性というのは外部環境との接触によって発揮される機能的な側面を持つ。こうした知性が意識の中には無数に存在している。また、一つ一つの知性は相互に影響を与え合っている。もちろん、その隣接度合いが遠ければ、相互作用の影響は小さくなるかもしれないが、一つの知性は一つの生物種だと捉えれば、意識というものがダイナミックな生態系としての性質を持っていることがわかるのではないかと思う。

© YOHEI KATO 2018

生まれたばかりの生物種、成熟の過程を歩んでいる生物種、病気を患っている生物種など、私たちの意識には様々な生物種が同居して生存している。こうしたメタファーを持つことによって、知性や意識を画一的に捉えることを少しは防げるのではないかと思う。また、知性や意識を何かしらの手段によってアセスメントする際や、それらの発達を支援する際にも、今現在行われているような極めて短絡的なアプローチを採用することに疑問を持つことができるようになるのではないかと思う。私たちの知性や意識というのは、非常に複雑な生態系なのだと改めて実感する。フローニンゲン：2018/10/6（土）19:49

3229. 静けさで満ちたフローニンゲンの朝

今朝は七時に起床し、七時半から一日の活動を開始させた。フローニンゲンの町の静かさが際立つような時間帯だ。今日は日曜日ということもあり、この時間帯には目の前の通りに車は走っておらず、外の世界の音は一切聞こえない。今聞こえてくるのは、書斎の中に流れるモーツァルトのピアノ曲だけである。

昨日は十時前に就寝したのだが、今朝の目覚めの時間を考えてみると、ボストンから戻ってきた調整がまだ継続しているようだ。オランダからボストンに向かった際には時差ぼけがあったが、ボストンからこちらに戻ってきた際には時差ぼけはほとんどなかったように思う。ただし、まだ意識が旅の瞑想的な状態であることを考えると、もうしばらくはゆったりとした過ごし方をしていく必要があるだろう。

昨日ふと、私たちの知性は確かに段階特性を持っているが、それは多分に意識の状態のような性質を持っているのではないかと思った。私たちが発揮する知性の種類とその変動性を踏まえてみると、それはますます意識の状態のように思えてくる。

ある文脈で発揮していた知性が別の文脈では突然発揮されなくなるというのは、私たちの知性が多分に意識の状態的な側面を持っているからかもしれない。上述の通り、そのような形で発揮される知性には段階特性もあるのだが、ある時は非常に高度な段階の知性を発揮できることもあれば、そうでない時もある。こうした変動性を見ていると、私たちの知性というものがますます意識の状態のように思えてくる。

昨年フローニンゲン大学の実証的教育プログラムの中で学んだように、私たちの知性は「分散的知性」としての特徴を持っており、環境そのものに知性が埋め込まれ、集合的に共有されているという見方もできる。私たちが発揮する知性がどのような場で誰と協働するかによって変動するというのは、まさに分散的な特徴を持っていることを示しているように思える。ここでも、環境や協働者の性質にいかんによって変動する知性を眺めていると、それが多分に意識の状態の特性と重なるように思えてくる。

早朝に天気予報を確認すると、今日からは一週間ほど天気の良い日が続くようだ。ただし今夜は、最低気温が3度まで下がるようであるから、寒さには気をつけたいと思う。今日の就寝の際には暖房をつけておいた方がいいかもしれない。

東の空から太陽が昇ってきて、空が薄赤紫色に輝いている。鳥たちの鳴き声も少しずつ聞こえ始め、今日という一日の始まりを実感する。

今日は早朝に、バッハの四声のコラールに範を求めて一曲作る。そして、本日の重要な取り組みは、ハーバード大学教育大学院（HGSE）への出願に向けて志望動機書を作成することである。

HGSEの芸術教育プログラムに関心を持ったのは今から半年以上も前のことであり、それ以降、志望動機書を書くための材料をメモとして書き留めていた。今日はそうしたメモを見ながら、字数制限が1500字の志望動機書のドラフトを完成させたい。

幸運にも、今回HGSEを訪れたことによって、関係者の方から志望動機書にどのようなことを盛り込み、どのように執筆していくかの助言を得ることができた。それらを参考にしながら、今回のHGSE訪問で参加したクラスの話や教授陣との面談の話などを盛り込んで行こうと思う。

まずは全体の構成を練り直し、各項目に対して文章を執筆していくようにする。まずは誤字脱字などは気にせず、1500字ほどの文章を一気に書き進めたい。瞑想的な意識を保ち、コーヒーを飲みながらドラフトを作成しようと思う。フローニンゲン：2018/10/7（日）07:58

© YOHEI KATO 2018

3230. これからの生活拠点

時刻は午前八時を迎えようとしている。目の前の赤レンがの家々の屋根に朝日が照り始めた。その上を鳥たちが飛んでいく姿が見えた。

今、目の前に映る空には雲が一切なく、成層圏まで見通せるかのようなライトブルーの空が広がっている。小鳥たちの鳴き声がこだましており、それに静かに耳を傾けている。

フローニンゲンのこの落ち着きには本当に感謝をする必要がある。この町の落ち着きの中で三年間の時を過ごせることは、どれだけ有り難いことか。

この三年間が自分の人生において非常に大切だったと言えるのは、こうした落ち着きの中でしか深めることのできないものを深めてきたからだろう。フローニンゲンでの三年目の生活は、これからまだしばらく続く。そのことに改めて有り難さを感じている。来年は、自分に多大な恩恵を授けてくれたフローニンゲンを去ろうと思っている。そのような決断をさせる時期がやってきたのだと思う。

フローニンゲンを離れ、人生の新たな一幕を始めること。それが自分に課せられていることを感じる。来年は、アメリカのボストンかスイスのドルナッハのどちらかにいるだろう。ボストンにいるのであれば、今以上に探究活動が進むであろうという確信がある一方で、フローニンゲンのような静けさを感じることは減ってしまうように思う。

おそらく、自分の人生の中で、大きな都市で生活をすることは今度が最後かもしれないと思っている。人が多く、時間の流れが速い場所で生活をするのではなく、静けさが十分に確保され、時間の流れが緩やかな場所で生活を営んでいくこと。それが近い将来にやってくることは確かであり、仮に来年にボストンで生活を営むことを決断したのであれば、それをもって最後としたい。自分に必要なのは、都市文明ではなく、つくづく自然なのだと思う。

自然を身近に感じられる場所で、日々の探究活動と創造活動を続けていくこと。そうした場所の候補が今少しずつ見え始めている。スイスのドルナッハはそうした候補の一つであり、オランダのいくつかの都市もその候補だ。仮に来年にアメリカで生活をすることになっても、アメリカで永住権を獲得するようなことはしない。

© YOHEI KATO 2018

アメリカよりも自分の生活スタイルに合う国がこの世界には数多く存在していることが明らかになっており、アメリカに戻ったとしてもそこで長く生活をすることはないだろう。アメリカに戻った後は、スイスのドルナッハで一、二年ほど生活をし、その後オランダに戻るかもしれない。オランダで五年ほど生活をして、EU圏内での永住権を獲得したいと思う。自分が落ち着いて生活できる場所は欧州の中にあるようだ。

欧米での生活も七年目を迎え、最近よく思うのは、母国へ何かしらの関与をするに際して、物理的に自分が母国にいる必要はないということである。これまでの七年間を振り返ってみると、日本企業との協働プロジェクトは全て日本の外で行っていた。

これからも物理的に日本で生活をする必要はないであろうし、自分のライフワークを真に深めていくためには日本の外で生活を営んでいく必要があることを感じている。この先の人生においてどこで生活を営んでいるかは、究極的には未知であるが、自分の中の促しによって導かれた場所で生活をしていきたいと思う。フローニンゲン:2018/10/7(日)08:19

3231. 志望動機書のドラフトの執筆を終えて

気がついたら昼食の時間が過ぎていた。つい先ほど昼食を摂り終えたが、昼食前に何に没頭していたかというと、ハーバード大学教育大学院(HGSE)に提出する志望動機書の作成である。ボストンでの体験を整理してから志望動機書のドラフトを作成しようと思っており、それには丸一日時間がかかるだろうと思っていた。しかし、いざ書き出してみると、自分の中から何かが流れるようにして、字数制限の1500字ほどの文章を午前中に書き上げることができた。この感覚はどこか、過去に出版した二冊の書籍を執筆した時の感覚と似ている。自分の内側にはすでに書くべき事柄が存在していて、後はそれを文字の形にすればいいという状態であった。

これまでの自分のキャリアの棚卸から始まり、HGSEの芸術教育プログラムで学ぶ目的は何なのか、プログラム終了後にこの世界にいかように関与していくのか。その辺りの事柄を一気呵成に書き上げた。ふと我に帰ると、昼食の時間を過ぎていた、というのが先ほどの出来事だ。

志望動機書のドラフトの執筆に対して一日中取り組む予定でいたのだが、それを午前中に終えることができて嬉しく思う。このドラフトを少しばかり寝かせ、あと何回か推敲を重ねたい。推敲後、一度

ネイティヴの友人にレビューをお願いしようと思う。レビューを頼む相手としては、昨年フローニンゲン大学で知り合ったスコットランド人のカルムにお願いしようと思う。

早朝と同じように、昼食後を摂り終えた今もまだスズメの鳴き声が時折辺りにこだましている。早朝には、スズメが窓辺に寄ってきたので、その姿を眺めてみると、とても愛らしい感情が芽生えた。

今日のフローニンゲンは本当に穏やかな雰囲気で包まれている。先ほど執筆した志望動機書の中でも言及していたが、HGSEの教授の中でも、最近はホウマン・ハロウニィ博士の仕事に着目している。おそらくは私とそれほど年齢は変わらず、数歳ほどハロウニィ博士の方が年上ぐらいだと思うが、その風貌には異様な貫禄がある。私が長らく注目をしている教育哲学者のザカリー・スタイン博士とハロウニィ博士は、同じタイミングでHGSEで博士号を取得している。

二人ともおそらくユダヤ人の家系を持っており、二人の雰囲気はどことなく重なる。そんなハロウニィ博士に先日連絡を取ったところ、数十分後にメールが返ってきた。有り難いことに、彼が提供している二つのコースのシラバスを送ってくださり、さらに深く二つのコースを知るために役立つであろうという配慮から、course evaluationの結果まで送ってくださった。

シラバスの必読文献には、ハンナ・アレント、パウロ・フレイレ、ジョン・デューイ、ミシェル・フーコーなど、私が注目をしている哲学者の書籍が並んでおり、私の関心を強く引いた。course evaluationに記載されている受講者のコメントを読むと、課題文献の読解の際にはリーディンググループを作り、他者との対話を通じて文献を多角的に深く読んでいくこと、そしてハロウニィ博士やティーチングアシスタントのサポートによって、文章執筆に関して随分と鍛えられることがわかった。

教育哲学に関して、そして芸術教育を取り巻く思想に関して深く探究を行いたいと考えている私にとっては、ハロウニィ博士の二つのコースは非常に有益だろう。シラバスの中に掲載されている課題図書の中には、すでに所持しているものもあり、これからパウロ・フレイレの“Education for Critical Consciousness (1969)”を読み始めようと思う。フローニンゲン：2018/10/7（日）13:40

© YOHEI KATO 2018

3232. 日曜日を振り返って

時刻は午後の七時半を迎えつつある。今日は当初の計画通りに、来年の大学院進学に向けた志望動機書のドラフトを作成することができた。ここから数日間ほど文章を寝かし、その後推敲を重ねた上で、ネイティブの友人にレビューを依頼したい。

この時間帯になると、もうフローニンゲンも暗くなり始めている。今目の前にはエメラルド色の空が広がっており、その色使いはとても美しい。

季節が秋に入り、自分の内側からこれまでとは異なるエネルギーが湧き上がっているかのようである。それはどこか、地上と繋がり、天に向かうようなエネルギーだと言えるかもしれない。一つの季節が終わりを告げ、新たな季節の始まりを実感するたびに、自分自身の変容を見て取ることができる。私の自己は、自然の運動と歩調を合わせて深まりの方向に動いているようだ。

今日は志望動機書の執筆に加えて、二曲ほど曲を作った。今日はこれから、先日レビューした協働執筆中の書籍の原稿を再度レビューし、協働執筆者の方に送る必要があるため、今日の作曲実践は二曲に留めることにする。今日はバッハとハイドンに範を求めたため、明日はテレマンとモーツァルトに範を求めようと思う。

作曲実践以外には、パウロ・フレイレの“Education for Critical Consciousness (1969)”を数章ほど読み進めた。フレイレの問題意識に共感することが多々あり、自然と余白への書き込みが多かった。また、いくつか興味深い概念をフレイレが提唱しており、それらについては折を見て自分の考えを日記の中でまとめておきたい。本書のある章は、先日連絡を取ったホウマン・ハロウニィ博士のコースの必読文献になっている。

ハロウニィ博士のコースのシラバスを読んでいると、彼が文章の読解と執筆に関する教育に極めて力を入れていることが伝わってきた。必読文献は少なくとも数回読み、リーディンググループを形成して複数人で議論しながら読むことを推奨していることからも、文献を深く読むことを大切にしていることが伝わる。また、文章の執筆に関しても、二週間に一度、自分の関心テーマとコースの内容をシンクロさせながら執筆する課題が提出されており、それに対する添削をテーィチングフェローとハ

© YOHEI KATO 2018

ロウニィ博士が入念に行うことが記載されていた。もし仮に彼のコースを履修する機会に恵まれたら、芸術教育を取り巻く社会思想をテーマとして文章を書いていこうと思う。

明日からも様々な文献を旺盛に読んでいくが、単純に多くの文献を読んでいくというよりも、自分の関心のある箇所を繰り返し読み、複数の書籍で着目したそれらの関心を結びつけていくような読み方を心がけようと思う。それは自分の中で関心テーマに関する知識を一つの有機的なシステムにする試みだと言える。

先週にハーバード大学教育大学院を訪れ、何人かの教授と面談をする中で、これまで自分が触れたことのない哲学者の仕事について言及をしてもらったため、彼らの功績を辿る際には、人間発達と教育に絞って彼らの仕事を参照していく。それら以外のテーマについて理解を深めようと思っても、今の私の関心がそれらになければ理解など深めようがない。そうしたこともあり、確かにこれから様々な哲学者の文献を数多く読んでいくことになるだろうが、人間発達と教育という根幹を忘れないようにする。フローニンゲン：2018/10/7（日）19:42

3233. 推薦状に関して

一昨日と同様に、今朝も十分過ぎるほどの睡眠を取った。昨日は七時には起床していたが、今朝は目覚めてみると午前九時だった。確かに、薄明るい時間帯に一度目を覚ましたが、そこで起床することをせず、結局九時まで寝ていた。昨夜就寝したのは夜の十時であったから随分と睡眠を取っていたことになる。やはりまだ、ボストンから戻ってくる際の時差ぼけが完全に解消されていないのだと思う。日中の生活には一切支障がないが、睡眠時間のところだけ狂いが生じているようだ。時差ぼけが残っているということは、まだ心身が調整期間にあることを示しているだろうから、今日も無理をせず、ゆっくりとしたペースで仕事に取り掛かっていきたいと思う。

昨日に、大学院の出願に向けた志望動機書のドラフトを執筆することができて、今はひと段落している。少しばかり文章を寝かせ、後日加筆修正を行いたい。出願に際しては、この志望動機書が最も重要な要素になるため、何度も推敲に推敲を重ねたいと思う。志望動機書に加えて、推薦状も重要な要素になる。

現在出願を考えているハーバード大学教育大学院には、三通の推薦状を提出する必要がある。直近の私の取り組みをよく知っている三名の方に推薦状の執筆をお願いしたいと思う。一人は、一昨年に所属していた「タレントディベロップメントと創造性」のプログラム長であるルート・ハータイ教授に依頼をする。もう一人は、一昨年の論文アドバイザーを務めてくださったサスキア・クネン教授だ。

ハータイ教授にせよ、クネン教授にせよ、昨年所属していた実証的教育プログラムに応募する際にも推薦状をお願いしていたたが、今回もまた推薦状の執筆をお願いしたいと思う。三人目は、昨年に所属していた実証的教育プログラムのプログラム長であるマイラ・マスカレノ教授にお願いしようと思う。マスカレノ教授のクラスを二つほど履修していたことがあり、なおかつそのプログラムに所属していたのは私だけだったということからも、度々話をする機会があった。マスカレノ教授も他の二人と共に多忙だと思うが、推薦状のお願いをしたいと思う。

上記の三人へ推薦状をお願いするのは今日中に行っておこうと思う。今日の夜にでもメールを送りたい。

ハータイ教授とクネン教授に関しては、以前執筆していただいた推薦状の文言を少しばかり修正していただくだけで良いように思う。マスカレノ教授には今回初めて執筆をお願いするため、どのようなことを書いていただくかをこちらの方で考えておく必要がある。マスカレノ教授に何を書いてもらうのかに関しては、今週の木曜日に考えておきたい。

書斎の目の前の景色が、ボストン旅行の前と随分異なっていることに気づく。街路樹はすっかり紅葉し、秋の到来を告げている。幸いにも今週は天気が良く、なおかつ気温もまだそれほど寒くない。これから徐々に寒くなっていくと思われるため、心身を秋の深まりと冬の到来に向けて調整していく必要があるだろう。今はとにかく、この素晴らしい秋の季節を謳歌したい。フローニンゲン：2018/10/8（月）09:49

3234. 発達を促す見えない力：意識を向けることの大切さ

ボストンからフローニンゲンに戻ってきて数日が経つ。その間に、アメリカとヨーロッパの文化的な違いについて改めて考えさせられている。いや、それは考えさせられているというよりも、感じさせられ

ていると表現した方が正確かもしれない。アメリカとヨーロッパに流れる文化的な空気と時間の流れは随分と異なるように感じられる。

確かに私は、来年は再びアメリカに戻ろうとしているが、アメリカの根底に流れるものとは相容れないような性質を自分が持っていることにも気づく。一方、ヨーロッパのいくつかの国に関しては、自分の深層的な性質と共鳴するような雰囲気を持つ土地がいくつかあることに気づいている。

来年アメリカに戻ることになったら、それは自己と相反するものと対峙することを意味しているのかもしれない。人間の発達は、対極的なものを統合する過程として捉えられ、絶えず今の自分と矛盾するような側面を包摂していくことを私たちに迫ってくる。そうしたことを考えると、根底部分で相容れないアメリカに戻ることは、自らの成熟を促すことになるのかもしれない。また、アメリカに戻ろうとする見えない力が働いていることを見ると、自己がさらなる成熟の歩みを進めるためにアメリカに戻ることは必然のようにも思えてくる。

そして、自己と相容れないアメリカの土壌そのものが自らの発達を促進するのみならず、そもそもアメリカに向かわせるその見えない力そのものが発達を喚起する働きを持っていることに注目しなければならない。人間の発達を促すこうした目には見えない諸々の力が存在していることに改めて驚く。

今日は昨日に引き続き、パウロ・フレイレの書籍の続きを読み進めていく。それに合わせて、キャサリン・エルギン教授の論文が収められた“The Oxford Handbook of Philosophy of Education (2009)”の続きも読み進めていきたい。こうした読書に並行して、先日ボストン美術館で購入した公式ガイドブックに掲載されている作品を眺めたいと思う。ボストン美術館に訪れる前に、ネルソン・グッドマンが美術館の意義と役割について執筆した論文を読んでいた。その中でグッドマンは、芸術作品が真にその真価を発揮するためには、十分な時間注視する必要があるということを述べていた。美術館の中で私は、グッドマンのその指摘にうなづいていた。

次から次へと作品を慌ただしく見ていくような態度では、作品の真価に気づくことはできない。作品が生きて呼吸をし始めるには、私たちの注視が必要なのではないか。そのような思いから、私は自分の関心を引く作品に関してはとりわけ注意深く意識を向けていた。

© YOHEI KATO 2018

すべての物事に通じることかもしれないが、意識を向けることの大切さを強く実感する。ある作品に意識を向ければ向けるほど、新たな気づきや発見が開示されていく。作品を真に目覚めさせるのは、私たちの意識であり、目覚めた作品が私たちに問いを投げかけてくる。私はボストン美術館の中で、作品と向き合う際に意識を向けることの大切さを改めて実感していた。

実物の絵ほど問いの喚起力が落ちてしまうかもしれないが、今日はガイドブックに掲載されているいくつかの作品の写真を眺めたいと思う。美術館の中で働かせる意識と書斎の中で働かせる意識の違いや、実物と写真に対して向ける意識、そして喚起される問いの性質などについても観察をしてみようと思う。フローニンゲン：2018/10/8（月）10:07

No.1339: The Moonless Night Sky

Today also is approaching the end. I can see the moonless night sky from the window of my study. I won't forget the moonlight always lighting in my heart. Groningen, 20:48, Monday, 10/22/2018

3235. ツールのツールに成り果てる現代人

先ほどテレマンに範を求めて作曲実践を行った。今朝は九時に起床したこともあり、日記を執筆していたり、作曲をしていたりするとあっという間に昼の時間を迎えた。午後からは旺盛に読書に励もうと思う。

午前中に、街路樹に二羽の鳥が休んでいる姿が見えた。二羽の鳥は街路樹の上で幾分くつろいだ後に、静かにどこかに飛び立っていった。

目の前に見える紅葉した街路樹が優しく揺れている姿が見える。街路樹も私たちも、揺れながら存在を深めていくことには変わりないのだなと改めて思う。

今日は月曜日なのだが、辺りは相変わらず静かである。秋のなんとも言えない落ち着きが目の前に広がっている。今日も私は読みに読み、書きに書き、作りに作る一日を過ごしていく。そうした過ごし方と秋の雰囲気が相まって、毎日がどこか感謝祭のように思えてくる。

© YOHEI KATO 2018

毎日が何かを祝う感謝祭として過ぎていく。そこには無情の充実感と幸福感がある。

昼食を摂る前に、先ほど一つ考えていたことがある。この現代社会において、本来ツールとして私たちが使うはずのものが、私たちをツール化しているのではないか、という現象について考えていた。つまり、ツールを使う主体と客体の関係が入れ替わり、ツールが私たちをツールとして使うような事態が生じているのではないかということだ。例えば、人間発達においては、アセスメントと私たちの関係などはそうだろう。

本来、さらなる成長や学習につなげるために活用することを目的とするアセスメントが、いつの間にやら私たちの成長や学習を阻害するようなものに成り果ててしまっている。言い換えると、本来知性や能力を測定するためのツールであるアセスメントがいつの間にやら、私たちの存在を縛るものになってしまっているということだ。

さらに見過ごせないのは、アセスメントによって得られた結果によって、私たち自身の存在が商品化され、私たちの存在そのものが社会の中で単なるツールに成り果ててしまっていることだ。本来、アセスメントはさらなる成長や学習を通じて私たちに解放を実現させるためにあるはずなのだが、いつの間にか人間を制約するツールに成り果ててしまっている。しかも私たちの存在は、そうしたツールによってこの社会におけるツールに貶められている状況にあるように思えてくる。現代社会は確かに便利なツールで溢れているが、それらのツールは暴走を始め、私たちの存在はますます単なる道具に成り果ててしまっているのではないかと危惧する。

取り上げているテーマは異なれど、この話題は今読み進めているパウロ・フレイレの問題意識とも合い通じるものがあるように思う。ツールのツールに成り果てることを防ぐためには、ツールそのもの及び自己の存在そのものと両者を取り巻く社会そのものの本質を考察できるような強靭な知性を育むことが不可欠であり、そうした必要性はますます高まるばかりであるように思えてくる。フローニンゲン：2018/10/8（月）12:13

No.1340: On a Solemn Morning

The sky of this morning is covered by clouds, and the atmosphere outside looks solemn. I can see some colors in the dark gray world. Groningen, 08:34, Tuesday, 10/23/2018

© YOHEI KATO 2018

3236. 古典的な読書法への回帰:創造プロセスの追体験

時刻は午後の四時を迎えようとしている。秋晴れの本日は、とても穏やかな太陽の光が地上に降り注いでいる。

先ほど近所のスーパーに買い物に出かけた時、確かに肌寒さはあったが、太陽の優しい光に包まれると暖かい気持ちになった。

これまで度々自分の読書の仕方について再考を余儀なくされることがあり、そのたびにより意味のある読書の方法を模索してきた。今日改めてそうした再考を余儀なくされる瞬間があり、とても古典的なのだが、書物や論文を読みながら、自分の関心を引く箇所のみを書き写し、それに対して自分の考えを付け加えるような読み方を実践していこうと思った。

確かにこれまでも、より能動的な読書を行うために、文献の余白に自分の考えを書き込んだりしていたのだが、それでも能動性が足りないように思い始めた。何かを考える際や、考えを深める際には、やはり知識が必要であり、それらの知識を組み合わせていくことが求められる。自分にとって重要な知識をしっかりと身につけ、さらなる思索のための基礎を確立するためには、これまで以上に能動的な読書が求められると感じたのである。そうした気づきをもとに、今日から読み進めている論文や書籍に対しては、ノートを取りながら読み進めている。

非常に古典的なこの方法を採用してみて気づくのは、ノートを取る際に立ち止まって考えることを余儀なくされることであり、それが文献の知識項目を自分の内側に一度通すことにつながっているのだと実感した。また単純に、手を動かしながら文献と向き合うことで集中力が保たれ、読解がはかどることにも気づかされた。

今日から心機一転、文献を読む際にはノートを取ることを心がけていく。このノートには、文献内の自分に響く記述を書き写すことと同時に、自分の考えを書き留めていく。さらには、日々内的感覚を絵として表現しているように、思いついた図やシンボルなども余白に書き留めておくようにする。これらのノートは、読み返す目的で書かれていくものではなく、読書体験そのものをより豊かに、より意味のあるものにしていくためにある。

© YOHEI KATO 2018

つい先ほど、芸術教育に関する興味深い論文を読んでいた。その中で、教育哲学者のジョン・デューイは、芸術作品の鑑賞者は、作り手と同じ経験をすることができる、という旨の発言をしていた。これは非常に興味深い発言である。

もちろん、作品の鑑賞者が作り手と同じ芸術体験をするためには、鍛錬と意識的な鑑賞が不可欠となるだろう。だが、芸術作品を通じてそうした体験ができるということそのものに、芸術の力を感じる。実はこれは、私も作曲実践を通じてよく感じることである。ここでは過去の偉大な作曲家の曲を聴くというよりも、彼らが創造した楽譜と丹念に向き合うことによって、その創造プロセスを追体験しているような感覚がすることがある。これは非常に不思議な感覚なのだが、楽譜に意識を向けてそこから意味を汲み取ろうとすればするほどに、その感覚は鋭敏なものになっていくように感じる。

今日はこれからモーツァルトに範を求めて二曲ほど作りたいと思う。その際には、モーツァルトの創造プロセスをあたかも追体験するかのように、モーツァルトの楽譜に意識を注意深く向けていきたいと思う。フローニンゲン：2018/10/8（月）15:59

No.1341: A Walk of an Angel after the Rain

It stopped drizzling, and a quiet afternoon came back. I can hear twitters of little birds.
Groningen, 15:25, Tuesday, 10/23/2018

3237. 記号的メタモーフォシス

時刻は午後の七時半を迎えた。つい先ほど、スコットラン人の友人であるカルムから、志望動機書のレビューをしてもらえるという快い返事をもらえた。

カルムはちょうど私が昨年所属していた実証的教育学のプログラムに今年から所属しており、先月から新たな学期が始まり、非常に充実した学術生活を送っているとのことである。もう少ししたら期末試験の頃だと思うので、カルムに志望動機書のドラフトを送るのは試験後にしようと思う。大学院への応募の締め切りまでは十分に時間的な余裕があるため、カルムに試験後にお願いをしたとしても十分なゆとりがある。

夕方にふと、自分の内面世界の中で、無数のシンボルが踊っているのを知覚することがよくあることに気づいた。普段何気なくそれらの一端を日記に書き留めたり、曲として表現したりしているのだということに気づく。実際に夕方に作った曲は、そうしたシンボルが外側に形となって現れたものだった。内側に生起するシンボルの不思議さについて考えていると、先ほど読み進めていた論文の中に記載のあった、アメリカの哲学者スザンヌ・ランガーの記述について思い出した。

ランガーは、私たちが知覚や感覚を言葉にすることによって初めて、そこに独自の意味が生成されると主張している。ランガーはそれを「記号的メタモーフォシス」という言葉を当てている。これはつまり、知覚や感覚に対して言葉の形を与えることによって、知覚的・感覚的な記号が言葉という別種の記号に変容することを示している。まさに私が自分の内側の感覚的シンボルを、言葉、絵、曲として表現しているのは、それぞれ言語的・絵画的・音楽的な意味でのメタモーフォシスだと言えるだろう。

こうしたことを日々実践していると、確かに自分の内面世界が徐々に変容していくのを見て取ることができる。そこから特に、言語的なメタモーフォシスの重要性について考えていた。その背景には、多くの現代人は芸術鑑賞にせよ、旅にせよ、知覚を単に消費しているだけなのではないかという問題意識がある。知覚されたものとゆっくり向き合って、それをじっくりと感じたり、それを言葉に表して味読するという実践がとても希薄なように思えて仕方ない。

そうした状況が、現代人の内面世界をますます空疎なものにしてしまっているのではないかと思う。ある事象を単に知覚するだけではなく、それを身体を通じて深く感じること、そしてそれを言葉として表現するという変換作業が私たちの体験をより豊かにしていくのではないだろうか。そしてそうした実践が内面世界の豊かさにつながっていくのだと思う。身体感覚と言語を通じて体験を味読していくことの大切さを改めて考え直したい。フローニンゲン：2018/10/8（月）19:47

3238. ハーバード大学教育大学院への出願に向けて

今朝は七時前に起床し、七時を少し過ぎてから一日の活動を始めた。ここ数日間は、ボストン旅行から帰ってきての調整のためか、睡眠時間を長く必要としており、起床する時間が遅かったが、ようやく普段通りのリズムで生活を送れそうである。

時刻は午前七時を迎えたが、辺りはまだ闇に包まれている。遠くの空がダークブルーにようやく変わり始めたぐらいだ。今日の最低気温は5度とのことであるが、どうやらそれは今夜の気温のようだ。日中は18度まで気温が上がるとの予報が出ている。確かに今日は比較的気温が低いが、週間予報を見ていると、これからの一週間は天気も良く、気温もそれほど寒くないようだ。

昨夜、フローニンゲン大学でお世話になっていた三人の教授にメールをした。来年再びアメリカの大学院へ戻るために、今年の末に大学院へ出願しようと考えており、推薦状の依頼をその三名の教授に行った。三人のうち二人には、過去に推薦状の依頼をしたとことがあり、その時は快く推薦状を書いていただいた。そのおかげで私は、フローニンゲン大学での二年目のプログラムに進学することができた。

今回初めて依頼をしたのは、昨年お世話になっていたマイラ・マスカレノ教授である。マスカレノ教授は、私が二年目に在籍していた実証的教育学プログラムのディレクターを務めており、彼女のコースを二つ履修したことからも、お互いによく知っている。仮にマスカレノ教授から快諾を得たら、どのような事柄を推薦状に盛り込んでもらうかを練る必要がある。すでに項目としては列挙しているが、それに追記する形で項目を練り直していきたい。

今回の大学院の出願は、やはりハーバード大学教育大学院（HGSE）だけになるかもしれない。その他にもいくつかの大学院を当たってみたが、そこには残念ながら自分が師事をしたいと思うような教授はほとんどいなかった。今のところ、HGSEに絞って出願をしようと思っている。だが、HGSEの競争率は高いため、受け入れられる保証は一切ない。

HGSEの出願結果を見て、アメリカに行くかスイスに行くかを検討したい。選択肢としては、スイスのドルナッハでシュタイナーの思想を学ぶというものもある。今のところ、来年の選択肢としてはそのどちらかになるだろう。

直近においては、今回HGSEに出願する修士号を最後のものとしたい。今後は博士課程に進学するかもしれないし、博士号を取得したとしても、またどこかの大学院の修士課程で学び直すことも十分考えられる。ただし、今回の出願をもって修士課程に進学することはしばらくないだろう。今回HGSEに出願するに際しては、準備を入念に行っていきたいと思う。

© YOHEI KATO 2018

幸運なことに、GREとTOEFLについては早い段階で要求スコアを獲得することができたため、後は志望動機書をより良いものにしていくこと、三通の推薦状、そしてCVの加筆修正などに焦点を当てて準備を進めていきたい。フローニンゲン:2018/10/9(火)07:31

3239. 今日の活動計画

辺りが少しずつ明るくなってきた。これからゆっくりと一日の探究活動と創造活動を開始していこうと思う。ボストン旅行の際には作曲実践から離れる日々が多かったが、旅行から戻ってきてからの数日間は一日に二曲作るリズムとなり、昨日からは三曲作るリズムに戻った。今日も時間帯を変えて三曲ほど短い曲を作っていこうと思う。

とにかく一つの詩ないしは短歌のような短さを心がける。日記においても長い文章を書くことがほとんどないように、作曲においても冗長さを避けたいと思う。要点は長いか短いかではなく、自分の内側の感覚を形として表現しきっているか否かにある。今は文章にせよ、曲にせよ、ある内的感覚を掴み、それを形にしようとすると、大抵は小さな形として落ち着く。

仮にそれを表現しきるために長い文章や長い曲が必要となるのであれば、その時は必然的に大きな形を取るだろう。だが今は、文章にせよ、曲にせよ、修練の時期にあることを忘れないようにしたい。

文章に関しても、日本語と英語の双方を高めていく。ここ最近は和書を全く読めておらず、毎日の生活の中で目にする日本語は自分の文章だけとなりつつある。こうした状況の中で、あるいはこうした状況の中にいるからこそ、自分の日本語が育まれていくのかもしれない。

今日はこれからまず、過去に作った曲を編集し、それを聞きながら内的感覚をデッサンしていく。昨日の日記で書き留めていたように、アメリカの哲学者スザンヌ・ランガーが提唱した記号的メタモーフォシスの実践を行う。一つには、音楽的なものを絵画的なものへ変換するということである。欧州での生活を通じて、欧州内の様々な美術館に足を運ぶ機会に恵まれてきたが、そのたびに絵画的なものを音楽的なものへ変換したいという衝動が芽生えていた。だが今はそれを行うほどの技量を持ち合わせていない。まずは、自分の作った曲によって喚起される感覚をデッサンしていくというベクトルの実践を行う。その後、テレマンに範を求めて一曲作る。

作曲実践がひと段落したら、今日も旺盛に文献を読み進めていく。読みたいと思う論文をいくつかPDFでダウンロードし、それを印刷しに近々大学のキャンパスに足を運ぼうと思う。今日は論文よりも、書籍を読み進めていきたい。

昨日に引き続き、パウロ・フレイレの書籍と教育哲学に関する書籍を読み進めていく。前者に関しては午前中に読み終えることが可能であろうし、後者に関してはその分量を考えると、数日ほどの時間がかかるだろう。

昨日から突如としてノートにメモを取りながら文献を読み進めていく実践を行い始めた。これは自分にとって非常に効果があるようであり、読書の集中力の向上を実感したのみならず、自分の既存のアイデアと書籍に記述されている事柄がより結びつくようになった。知識のネットワークと思想を育んでいくためには、この点は大切になるだろう。今日もノートにメモを取りながら、能動的に文献を読み進めていく。フローニンゲン：2018/10/9（火）07:49

3240. 協働執筆中の書籍の進捗状況

早朝は雲が空を覆っており、寒さを感じていたが、今はすっかりと空は晴れ、気温も少しばかり暖かくなった。外の世界には活動的なエネルギーが静かに湧いているように見える。

早朝に、テレマンの曲に範を求めて一曲作った。いつもながら、テレマンの曲が持つメロディーには独特な魅力があることを感じた。

今はもっぱら、テレマン、バッハ、ハイドン、モーツァルトに範を求めて曲を作ることが多くなった。一方で、今聴いているのはシベリウスのピアノ曲だ。当然ながら、作曲において範を求める作曲家の曲を聴くことは多いが、特定の何人かの作曲家に範を求めている期間は、あえて彼らとは別の作曲家の曲を聴くのは悪くないかもしれない。

午前中には、“The Oxford Handbook of Philosophy of Education (2009)”の続きを読み進めていた。今日現在までは、本書に収められている28本の論文のうち、ハーバード大学教育大学院に在籍している哲学者のキャサリン・エルギン教授の論文しか読んでいなかったが、今日からは最初の論文から目を通すことにした。

今読んでいるのは、教育の認識論的目的に関するものであり、仮に教育の目的の一つに知識の獲得があるとするならば、それはどのような特性を持つ知識なのかについて取り上げている論文である。この論文を読みながら、随所に下線を引き、ノートにメモを取る機会も多かった。

ゆっくりとだが着実に、教育哲学に関する理解を深めていく。今の私は恐ろしいほどに、教育に関する無数の問いに対して何ら自分の考えを持ち得ていない。これはもしかすると、人間発達に関してもそうであるかもしれない。教育や人間発達を取り巻く問いは無数に存在しており、自分の関心を引きつけてやまない問いと絶えず向き合っていくことによって、徐々に両分野の思想を深めていこうと思う。

今日は昼食後に、現在協働執筆中の書籍に関して、協働者の方とオンラインミーティングを行う。いよいよ本書の執筆も最終章を迎えた。今日のミーティングでは、本書をどのように締めくくっていくべきかについて意見交換をすることになるだろう。中間の第三章と第四章の分量が多かったため、第五章は比較的少ない分量とするかもしれないが、その分本書の着地のさせ方には注意を払う必要があるだろう。

本書の物語の展開によっては、もしかすると第五章も引き続き分量が多くなるかもしれない。その際には、これまでの章とのつながりを念頭に置きながら、間延びしないようなストーリーにしていく必要があるだろう。本書の最終章はできれば10月に執筆し終え、11月の半ばには編集者の方に原稿を渡せればと思う。そこから何回か編集を重ねていき、一月か二月、遅くても三月までには書籍を世に送り出せたらと思う。

本書の執筆に並行して、一月からは先日以来を受けた監訳の仕事に取り掛かる。こちらの監訳も四月か五月に完成する予定であり、夏までには出版ができそうだ。自分が培ってきた知見を出版物として共有していくことは、自分に与えられた一つの役割なのだと思う。フローニンゲン：2018/10/9（火）11:59

© YOHEI KATO 2018